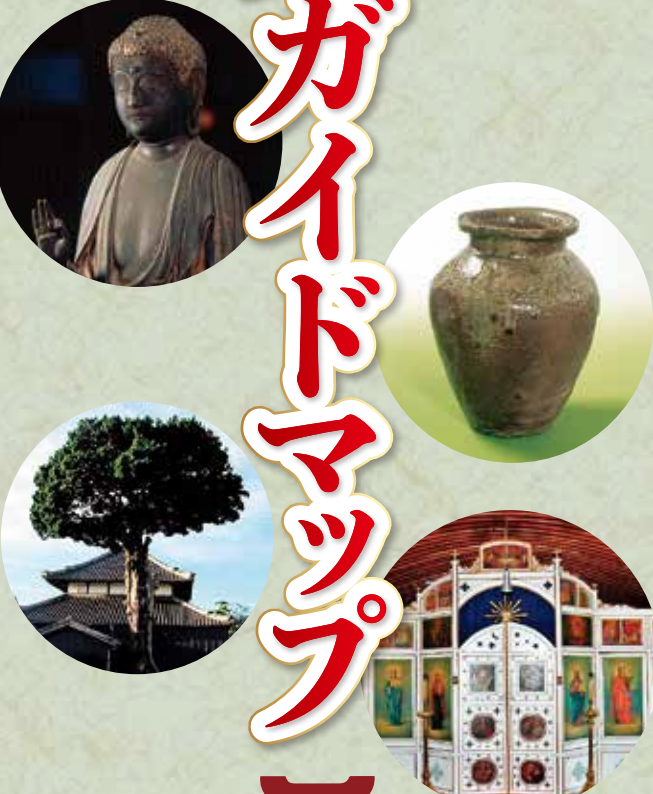




▲文化財
ホームページ

半田市の文化財ガイドマップ



19 津島社のムクノキ

ニレ科の巨大木であり、目通りの幹周り385cm、根廻り450cm、樹高は12.5m。津島天主講によって定期的に剪定するなど大切に保存されている。

20 聖観世音菩薩立像

像高107cm。松材の内割り(うちぐり)のない一木造りであり、両手に桶縁がされているが、保存状態は良く、藤原期の特色を備えた地方仏の典型とされている。台座や持物は後から付けたものである。

21 中村組神輿

業葉神社の神輿で、毎年、下半田地区の祭りでは4輦の山車の先頭を司る。この神輿には、古来から縁起がよい動物とされている鳳凰、龍、麒麟、亀の「四瑞(しうじ)」が付けられ、屋根は漆塗りで金箔が施されている。古文書(神輿取建請申帳)からは文化13年(1816年)に建造されたことがわかる。

22 業葉神社の古面

古面は業葉神社に神宝として伝わるものであり、材質はクスノキで、大きくゆがむその面相は芸術化される前の神事面の様相を呈している。およそ室町時代に信仰の対象として制作されたと考えられている。

23 下半田祭礼行事

毎年4月の第3土・日曜日に行われる下半田・業葉神社の例祭である。氏子から曳き出される4輦の山車と神輿を中心に、からくり人形・お囃子の奉芸や宵宮など様々な行事が行われる。時代の変遷に伴い多少の変更を繰り返しながらも、山車が神輿の警固のため曳き回されるという基本的な形態は変わらずに受け継がれている。

24 萬三の白モッコウバラ

中国原産のバラ科のつる性常緑低木で、樹高は約4m。根元から2本に分岐した枝の幹節にはそれぞれが約60cmと太く、幹全体で特徴的なハートの形を描いている。小栗家住宅の築造年から植栽は明治初期頃と推定され、国内では最古・最大級のモッコウバラといえる。

25 雲観寺鐘楼

豪快堅固な石製の基礎に建つ母屋造り木瓦葺4本柱の鐘楼である。現されている2枚の棟札からは、安永2年(1773年)に建立され、文政8年(1825年)と嘉永元年(1848年)に造作修理が行われたことがわかる。

国指定文化財

1 亀崎潮干祭の山車行事

かめざきおほひまつり

毎年5月3日、4日に行われる神前神社(かみさきじんじゃ)の祭りでは、神武天皇の上陸伝説にちなみ、山車を潮が干いた浜へ曳き下ろしたことが名前の由来になっている。祭礼は、江戸時代からの強固な結束力で運営される5つの組によって守り伝えられている。平成28年には、ユネスコ無形文化遺産にも登録された。

2 旧中笠家住宅

附 棟札1枚 設計図2幅(配置図、1-2階平面図)

明治44年(1911年)に第10代中笠半六が建てた洋風の別荘。複雑な壁面と急勾配の屋根をうまく組み合わせ、変化に富んだ外観を造りあげている。日本におけるハーフトンパースタイルの住宅の遺例として重要であり、建てられた当時のありのままの姿をよく残している。設計は、当時東海地方で活躍した建築家の鈴木楨次によるもので、設計図や棟札も保存されている。

3 木造阿弥陀如来立像

像高79cm。寄木造りで、手は来迎印を結び、左足をやや前に出して、一切の衆生を救うために一歩踏み出そうとする姿を表している。頭部内の墨書から、弘長3年(1263年)、法橋円寛の作であることが判明しており、鎌倉時代の仏像の典型例と言われている。

4 半田の酢醸造用具

はんたのすじょうそうぐ

中笠醸店(現ミツカンホールディングス)から半田市に寄贈された酢の醸造用具で、日本の香つくりの技術や製酢業の歴史を考える上で重要な資料とされている。博物館の展示室では粕酢の醸造に使用された実物を工程ごとに見学することができる。

県指定文化財

1 亀崎潮干祭の山車(5輦)

かめざきおほひまつり

5輦の山車はそれぞれに芸術的で精緻な彫刻、豪華な刺繍幕などで飾られ、祭礼時には、からくり人形の技芸も奉納される。祭礼の中で、勇壮な山車の海浜曳き下ろしは、最大の見どころとして有名である。

2 大高山古窯

おたかみやまごや

鎌倉時代前期から中期にかけて築かれた密窯で、7基の窯体からなる古窯群である。出土品はほとんど山茶碗と小皿であるが、唐草文軒平瓦が近くで見発見されている。窯の窯体は焚き口から焼成室・上部まで残存しており、現在は覆屋で保護されている。

3 摂取院のイブキ

せつしゆいのいぶき

樹高が15mほどもある半田市では珍しいヒノ科の大木である。かつて伊勢湾台風などの被害で下枝などが折れたために幹から枝を切り戻した跡が残っているが、現在は樹勢を取り戻している。

4 大獅子小獅子の舞

おおししのこ獅子のまい

起源は江戸時代の中頃とされ、成岩神社の祭礼時に神楽奉納の後、境内の舞場で奉納される。大獅子の舞はおおらかな舞で、白鶴の冠を付けた「ささらすりの童子」とともに舞い、小獅子の舞は軽快な舞で、天に昇るとする龍の姿を演じて舞う。

5 板山獅子舞

いたやましし

天保6年(1835年)頃に現在の江南市から知多半島に伝わったと言われている。男性が黒敷付き、紺股引き、白足袋の姿で左手にマフ、右手に鈴を持ち、女形所作で演じる場所が大きな特徴で、「一人立ちの嫁獅子」とも言われている。

市指定文化財

1 亀崎渡船場跡

かめざきわたばた

亀崎は古くから良港として開け、知多半島から三河(田戸・高浜・大浜)へ渡るのにこの渡船が利用された。衣浦大橋が開通するとその役割を終えて姿を消し、今は番所の跡にあった燈明台と称した文化5年(1808年)に銘の高さ4mの常夜燈1基が残っている。

2 血誓の阿弥陀如来絵像

けつせいのみみだにょうらいどう

元亀元年(1570年)から天正8年(1580年)まで、織田信長による大坂本願寺攻めに抵抗する誓いのため、署名血判を阿弥陀如来絵像の裏面などに押したものである。この絵像は遠賀県長浜のものであると考えられ、浄願寺の四世である林正が本願寺に尽くした結果、与えられたと伝えられている。

3 秋葉社本殿

あきははほんだん

天保12年(1841年)に諏訪の名工、2代立川和四郎富昌によって造立された。小型の本殿ながら、総ノキ造りで、木鼻・組物など極めて精緻な細工や彫刻が施されている。拝殿の最奥部に安置されている。

4 平地神明社の算額

ひらちんめいしやのさんかく

算額は、江戸時代に発達した算術(和算)の絵馬で、社寺に奉納する日本独自の文化である。この算額は、明治16年(1883年)に平地の竹内善七が奉納したもので、縦39.5cm、横70.5cmの杉板に自作問答形式の幾何学に関する問題を図とともに説明したものである。

5 向山神楽獅子の館

むかひやまからししのやうた

神の依代である獅子頭を安置して選ぶ館(屋形)で、明和4年(1767年)に制作されたものである。向山は、かつては乙川祭礼において獅子舞を司り、宝暦5年(1755年)の乙川八幡社祭礼絵図の先頭に行く獅子子、向山獅子であるとされている。

6 向山神楽獅子の神事

むかひやまからししのしんじ

名古屋城を築くときに、道中の無事を願って築石を運んだ台車の露払いをしたのが、向山獅子に由来している。幾多の変遷を経て、現在は向山の山車嶋神社の祭礼神事などで、獅子舞が行われている。

38 多聞天立像

たもんてんりゅうどう

像高104.5cm。一木造りで、左右の肩から先と、腰から下を左右の腕帯、両腕先、金具は後付けたものである。体が細くついで腰が低く、裾が重い感じを示しており、藤原中期後(平安時代後期)の特徴をよく表している。

39 地藏菩薩立像

じそうぼつりゅうどう

像高86cm。松材の一木造りで、鳳凰観音教会本尊厨子に多聞天立像とともに祀られている。保存状態も良好であり、木造の地藏菩薩は当地方でも珍しいものである。

40 薬師如来座像

やくしにょらいどう

像高85cmで彫彫、わずかに漆落が残っている。頭の形や表情の円満さ、衣文線と呼ばれる着物の波の波のうろ筋が少なく、浅いなど、平安時代の仏像の特徴を良く表している。なお、台座・薬壺は後補である。

41 聖観世音菩薩立像

せいこんぜおんぼんばつりゅうどう

像高147cm。一木造りで背割りがあり、台座は後で付けられたものである。左脚に体重をかけ、右足をわずかに遊ばせている姿と、腰から脚にかけての浅い衣文線は、ともに藤原期後(平安時代後期)の作を表している。

42 大日如来座像

だいにちりゅうどう

像高137cm。胴部は一木造りで背割り、膝部が短ぎつてある。左右とも肘から先は後補で、光背と台座は失われている。本尊の薬師如来座像より少し古く、藤原期後(平安時代後期)の作と言われている。

43 乙川文書

おつかわもんじ

江戸時代から明治期にかけて幕府と村との間で往復された行政文書を「地方文書」という。乙川文書は旧乙川村の「地方文書」で、年代は慶長年間(1596～1615年)から明治初期(1868年頃)にかけてのものである。内容は、検地帳、名寄帳、宗門改帳、免定、年貢受取、普請配符帳などよくまとまっており、この地方の歴史研究を行う上で、貴重な資料である。

44 西成岩文書

さいせいわもんじ

旧成岩村西成岩の「地方文書」で、内容は、検地帳、名寄帳、宗門改帳、免定、年貢受取、普請配符帳、地租改正関係などがある。●乙川文書と同様、この地方の歴史研究を行う上で、貴重な資料である。

7 乙川八幡社本殿

おつかわはちまんじやほんだん

八幡社は、古くは入水上神社とも呼ばれた由緒ある神社で、現在の本殿は、文政9年(1826年)に建立された。彫刻は、名古屋周辺の社寺や山車彫刻を手掛け、「彫長」の名で知られる名工、六代早瀬長兵衛吉政によるもので、特に蟬虹梁に見られる「上り籠・下り籠」は傑作で、この本殿彫刻は長兵衛の代表作の一つとされている。

8 乙川八幡社社地絵図面

おつかわはちまんじやぢえず

文政3年(1820年)当時の乙川村内全神祠の社地測量図である。和紙(43.5cm×31cm)を32枚つないだものに、社地絵図の彩色姿図と説明書きが記されている。寺社奉行所に提出したものの「控え」と考えられている。

9 乙川八幡社絵馬群

おつかわはちまんじやえうまぐ

絵馬はもともと生馬を祈雨、祈晴、祭祀に供献したことに由来するとされているが、馬の絵に限らず、信仰を目的として神仏に供される絵や額の種類も絵馬と呼ばれる。八幡社(乙川彫明)に伝わる絵馬9面は、豊作、雨乞い、禁断等諸祈願のためのものである。

10 乙川八幡社祭礼絵図

おつかわはちまんじやまつりづ

宝暦5年(1755年)7月に尾張藩が行った村々々の寺社神事祭の調査に応じて、八幡宮神主藤原若狭により作成された絵図で、村方の控えとして残されたものである。山車の先頭に行く獅子舞や神輿を始め、当時の乙川地区の祭礼行事の様子を確認することができる貴重な資料である。

11 乙川祭礼行事

おつかわまつりじ

毎年3月下旬の土・日曜日に行われる八幡社の祭りで、4輦の山車を中心に、様々な行事が繰り広げられる。祭礼の古い由来歴を知ることができる記録が残されており、江戸時代中期の絵図資料より、視覚的にも当時の状況をj知ることができる。

12 半田ハリストス正教会「聖イオアン・ダマスキオン聖堂」

はんたはりすとすせいきやうかい せいいおあんだますきんせいどう

大正2年(1913年)に成聖された、民家に近い礼拝施設の形式を保持した木造平屋建ての聖堂建築である。天井は東南西北に緩やかに湾曲し、主屋全体でドーム天井を表現している。ハリストス正教会の聖堂は全国的に数が少なく、知多半島の歴史や宗教史を知る上で重要である。

45 半田山車まつり市内9地区の山車(26輦)

はんただまつりしや市内9ちゆうのたまし

毎年3月から5月にかけて市内各地区の神社を中心に、精緻な彫刻や豪華な装飾で飾られた山車(半田型)を曳き廻す祭礼が次々に行われる。乙川、岩滑、岩滑新田、上半田、下半田、協和、成岩、西成岩、板山の9地区26輦すべてが市の有形民俗文化財に指定されている。

46 三筋壺

さんしんか

昭和43年(1968年)、鎌倉時代初期の古窯である長成池第1号窯(新野町)の学術調査中に、2個並んで出土した。高さ25cmで、胴部に3本の筋が入っている。全体に茶褐色で、口縁部から肩にかけて淡緑色の自然釉がかかり、地肌との間に美しいコントラストをつくっている。

47 陶製花瓶

とんせいびやう

昭和30年(1955年)、稚ノ木町から開墾の際に発見された。高さ27cm、口径7cm、胴径15cmで、素地は灰色を帯びた荒い土で表面暗褐色にこげている。頸部と肩の間に段のある点に特色があり、これは、正倉院の三彩甕や国宝秋草文甕など奈良、平安時代に見る特別な様式である。

48 巴文大甕

ばもんおおが

昭和21年(1946年)まで市内の庭園に水鏡として伝世使用されていた。高さ61.5cm、口径40.5cm、胴径61.5cm、底径17cmで、肩部には八個の尾長巴紋を備え、小口煉瓦タイルに花崗岩を帯状に3箇所組み合わせる意匠が特徴で、柱の頸部に花崗岩の飾り石、頂部には球形の照明を配置している。

49 板山万歳

いたやまんざい

門付万歳・三曲万歳・御殿万歳の3種類の演目が行われている。立烏帽子・小素履を着用した大夫と大黒頭・小袖・袴を着用した万歳で演じられ、楽器も三味線や弓を加えて華やかな舞台が繰り広げられる。

13 半田ハリストス正教会の聖障(イコノスタス)

はんたはりすとすせいきやうがいのせいしやう

聖障(イコノスタス)とは、教会奥の聖壇所と一般信者席を仕切る壁のことで、イコンと呼ばれる聖像が飾られている。中央に王門、左に北門、右に南門とよばれる聖壇の一般的な構成で、大小27枚のイコンが配置されている。

14 常福院のソテツ

じょうふくいんのそてつ

オスの一株で、根際に盛土を施し、約20本の幹が直立している。最高樹高は6m、幹囲2m、株の直径5.2mである。常福院は、岩滑中山氏の菩提寺として永禄年間(1558年～1570年)に開山され、この時にソテツが寄進されたといわれている。

15 旧新美家住宅(新美南吉養家)

きゅうめいはらけしやうたく(にいみやなんきちやうたく)

「こんぎつね」や「手袋を買いに」で全国に名を知る半田市出身の童話作家、新美南吉の生母の実家である。8歳の時に南吉は新美家の養子となり、短期間であるがここで過ごした。主屋は田の字型に仕切られた部屋で構成される「四つ住まい」で、外観には今では珍しい茅葺き(かやぶき)の屋根を残している。

16 ちんとろ祭の三番曳

ちんたらまつりのさんぱんえ

上半田地区の祭礼は「ちんとろ祭」と呼ばれ、2輦の山車の町内曳きと住吉神社境内の宮地に浮かぶ2艘の「ちんとろ舟」を中心に様々な行事が行われる。その舟上で三番曳の舞が奉納される。宵宮には、舟の中心に12か月を表す12個の提灯とその周りに1年365日を表す365個の提灯が半球形に飾られる。

17 阿弥陀如来立像

あみだにょらいりゅうどう

像高89cm。松材の寄木造りで、来迎印を結ぶ姿は地方における浄土教の広がりを示し、鎌倉時代初期の作とされている。寛文5年(1668年)第6世法眼法師が常滑大野の光明寺から寺号(順正寺)とともに譲り上げたものである。

18 絵像阿弥陀如来(大品)裏書

えいざうあみだにょらいりゅうどうが

順正寺に伝わるこの絵像は、永正10年(1513年)に本山の法主實如上人から道場創立者の宗園法師に下附されたものである。裏書には、「尾州智多郡坂田郷」とあることから、上半田の地は16世紀ごろは坂田郷と呼ばれていたのではないかと推測されている。

50 大池古窯

おほいけごや

平安時代末から鎌倉時代にかけて築かれた密窯で、お隣の窯体と前後部や灰原からなる古窯群である。出土品は山茶碗・小皿をはじめ、短頸壺・広口壺・横・片口鉢・三筋壺など多種にわたる。現在、窯体3基は半田運動公園内の覆屋で保存されている。

国登録有形文化財

1 半田赤レンガ建物(旧カプトビール工場)

はんたあかれんがたてもの

明治31年(1898年)に、妻木頼賢の設計によって建設された5階部分を持つ高層の煉瓦建造物で、本格的なドイツビールの醸造が行われた。ビール工場として安定した温度や湿度を保つための複雑で、耐火床などの構造が特徴である。現存する煉瓦建造物が少なくはなっている中で、全国でも最大級の規模を誇っている。

2 小栗家住宅

おくりけしやうたく

小栗家は、江戸時代以来、「萬三商店」という屋号で、醸造業を営み、肥料・米穀などを商ってきた。この地方屈指の豪商である。全体で20を超える建造物のうち、主屋(明治33年築)、表門、辰巳蔵、書院、茶室、渡り廊下、北座敷、離れ(竹の間の)8棟については、質の高い状態で残され、国の登録有形文化財となっている。

3 愛知県立半田商業高等学校正門門柱

あいちけんりつはんたしょうぎょうこうがっこうせいもんもんちゆう(旧愛知県知多郡立高等女学校正門)

門柱(通称:赤門)は、大正10年(1921年)に愛知県知多郡立高等女学校の正門として建設されたものである。門柱は脇柱を備え、小口煉瓦タイルに花崗岩を帯状に3箇所組み合わせる意匠が特徴で、柱の頸部に花崗岩の飾り石、頂部には球形の照明を配置している。

半田市立博物館

〒475-0928 愛知県半田市綱ヶ丘4-209-1
TEL 0569-23-7173 FAX 0569-23-7174
E-mail: hkbutsu@city.handa.lg.jp
https://www.city.handa.lg.jp



博物館
ホームページ

発行 令和3年3月